

特集：入学

岩をも砕く女の覚悟

中野 賢太郎（筑波大学 生命環境科学研究科）

ご入学おめでとうございます。この度、私、4クラスの担任を務めさせていただくことになりました。これからの数年間、よろしくおつきあい下さい。私自身は、教員として、研究者として、そして我が子の親としても後悔が多い毎日の連続です。そのため、新入生の皆様に何かして差し上げられるようなことは多くないと思います。が、「痒いところに孫の手」のごとく、何もないよりはましという程度に、頼っていただけたら幸いです。

さて、フレッシュな皆様へメッセージをお伝えするように依頼されたのですが、気が利いたことが思い浮かびません（生来、人に温かい言葉をかけたり、誉めたりすることは苦手なものですから）。世間では、大学の教員は立派で饒舌だという誤った認識をお持ちの方が多いようですが、全員がそうではありません。これはイタリア人男性が常に街中で女性を口説いていたり、あるいは大阪府民の全てが阪神タイガースのファンだというくらいの偏見でしょう。本学の学生になられた皆様には、早晚、内向的で口下手な大学教員が少なくないことに気がつかれることでしょうか。そのような教員については、私も含めて、温かい目で見守って下されたら幸いです。このような次第で、この原稿を書かされることは大変に苦痛です。きっと、この原稿を読まれている方にとっても辛いことでしょう。なるべくこの文章が皆様の目に触れないように切に願います。

私も学生の時には、研究者になるには優れた能力を備えていなくてはダメだと信じていた一人です。未だに、学会などで他の研究者のプレゼンテーションを見て、コンプレックスを感じる事が多々あります。思い起こせば、大学4年生の時に卒業研究でお世話になった教授から、開口一番、「能力のないものは研究をしても無駄だ。どんなに努力しても、優秀な人を超えることはできない」と釘を刺されました。確かに、優れた方が毎日8時間研究されたら、その3倍努力するのは無理です（1日は24時間ですから）。確かに、どうにもならないこともあるんだと妙に納得しました。「成せば成る」という成功者だけが語る名言がありますが、たいていは「成そうとするけど成らん」というのが現実でしょう。

その後、私は自分のポテンシャルに多めに疑念を持ちつつも、現実を直視することは避け、博士になってみたいという希望だけで大学院時代を過ごしました。それでも大学院時代にお世話になった教授からは嫌みの一言もなく（記憶にないかもしれませんが）、研究をやりたいうにやらせていただきました。ありがたいことです。この先生からは、修士課程の時に「まだ君は研究というものをやっている実感はないよね？」という不可解なお言葉を頂戴しました。その時は、なんとなくカチンと感じただけですが、未だに胸に残る一言です。研究って何なのでしょうね？

結局、博士号取得後にポスドクというものを数ヶ月やって、運良く大学に職を得て、それなりに現在に至っております。ちょっ

とした運命の違いで、別の人生を送っていた可能性は大きかったでしょう。ですから、幸運に恵まれていたことを素直に感謝しています。そしてこの先も、幸運が続くことを祈るばかりです。

さて自分のことを長々と書いてしまい、本当に赤面ものです。最後に、最近、読んだ本の中から感じたことを紹介したいと思います。これはキューリー夫妻についての話です。当時、レントゲン博士のX線の発見は世界的なニュースであり、放射線についての関心と研究がにわかに広がります。ベクレルによるウランが発する放射線の発見を受けて、キューリー夫妻はウランよりも強い放射能をもつ成分がピッチブレンドというウラン鉱石に含まれていることに気がつきます（ちなみに放射能という言葉は、最初にキューリー夫妻の論文で使用されたそうです）。そして、その未知の元素をつかまえようとするわけなのですが…。

ピッチブレンドとは、蛍光を発するウランガラスの原料です。しかし実験に大量のピッチブレンドを必要とするも、キューリー夫妻には高価で手が出ません。そこで、ウランを抽出したあとの残滓鉱石をタダでもらえるように交渉します（ウランが目的ではなかったのに、むしろ好都合だった）。最終的に8トンのブレンドピッチを砕いて、わずか0.1ミリグラムのラジウムを手中に納めることに成功したのです。この話を読んで私を感じ入ったことは、彼らが研究に着手した時点では狙った元素を必ず精製できる保障はなかったわけで、それにもかかわらず、オーストリアからフランスまで荷馬車で運ばせた行動力（しかも輸送費用は自己負担！）、そして、数トンもの岩石をハンマーなどで砕いて細かにする肉体労働をやり遂げたことです。まともな人間だったら、そんなに大量の石を一生懸命に砕いたりしませんよね。資金不足とか、虚弱体質とか、いくらでも言い訳できたわけですから。それでも、この夫人はボロ倉庫を利用した実験室で夢を語りながら、研究に没頭した時間が一番幸せであったと回想されています。結局、自分がやってみたいことはやってみる、成果の保証はなくても自分が信じたことはやってみる、そして仲間がいれば心強いといったことが肝要なのですかね？

本学に入学された皆様には、「やってみる」の精神で学問や研究に取り組んでいただきたいと思います。もちろん、やってみたからといって見返りは必ずしも保証されていませんよ。その過程における精神的な充実感をご堪能ください（単なる自己満足ではいけません）。さらに志を同じくする仲間も見つかるとういすね。皆様のご活躍を期待しています。

余談ですが、私の場合、漬物石ひとつでさえ粉碎しようという気概さえ持ち合わせていないことが悔やまれるばかりです。

Contributed by Kentaro Nakano, Received April 27, 2011.